

名古屋美術館開館20周年によせて

名古屋美術館は、今年、開館20周年を迎えました。市民の皆様をはじめ多くの方々に助けられながら歩んで来た20年間でしたが、その間、様々なことがありました。今回のアートペーパーでは、この20年間名古屋美術館と深く関わってこられた方々に文章をおよせいただきました。また、美術館の中であって運営に携わってきたメンバーが、20周年に際して思うことなどを綴っています。どうぞ楽しんでお読みください。

開館20周年を迎えて

名古屋美術館館長 渡辺 豊彦

1988年4月22日に特別展「20世紀絵画の展開」でオープンして以来、早いもので名古屋美術館も20周年を迎えることになりました。国際文化都市を目指す名古屋市が、文化の香り高いまちづくりを実現するために建設したこの美術館は、市民の皆様方から寄せられた熱い期待を背負って出発いたしました。周知のように当時は日本の経済も急成長を遂げている時期であり、列島全体が興奮の渦に包まれているような雰囲気がございました。とりわけ美術の分野に対する一般の関心は高く、海外のオークションで日本人が高額の絵画を次々と競り落したり、当館をはじめ新しい美術館が全国各地に相次いでオープンし、様々な美術記事がマスコミ等を賑わしたのもちょうどこの頃のことでした。そのような熱気に包まれて出発した当館は、知名度の高い特別展を数多く開催したこともあって、開館から1年を待たずして100万人を超える大勢の来館者の方々をお迎えするという、これ以上はないスタートを切ることができました。また昨年惜しくも世界されました黒川紀章さんの設計による斬新な建築デザインは、それ自体が美術品として多くの市民の方に愛され、今日にいたっております。

美術館の活動の中核にあるのは、なんといってもコレクションです。地道な調査研究を背景に、優れた美術品を数多く収蔵し展示するというのが、美術館の最大の使命といえますが、構想段階では全くコレクションを持っていなかった当館の場合、その充実には

多大な労力と時間を必要としました。しかし、開館前の準備段階から数えて20有余年、当館は現在では4000点を超える充実したコレクションを誇っています。エコール・ド・パリ、メキシコ・ルネサンス、現代美術、郷土美術の4本の柱に沿って収集されたこれらの作品は、その質の高さと幅の広さで高い評価をいただいております。市民の皆様方にも楽しんでいただくだけでなく、海外を含む数多くの展覧会への出品が相次いでおります。また、これらのコレクションを生かして展開される教育・普及活動については、当館は全国に先駆ける形で様々な企画を実現しており、手前味噌ではございますが、他館の目標となるような実績を積み上げてきたものと考えております。

このように開館以来、充実した20年間を経験してまいりました名古屋美術館でございますが、日本という国の状況が20年前とは異なるように、美術館を取り巻く状況も20年前とは大きく変わってきております。厳しい財政状況、趣味の多様化など、美術館をめぐる状況は近年その厳しさを増しており、開館当初のような熱気が薄れつつあるというのが実際のところですが、しかし、このような時こそ美術館の真価が問われるものと考えます。市民の皆様方の生活の中にしっかりと根付き、親しみを感じて足を運んでいただける憩いの場となるよう、これまで以上に努力を積み重ねていきたいと考えております。20年という歳月は、人間でいえばようやく成人を迎え、これから様々な成果を生み出すために始動する時期に当たります。名古屋美術館もこれまでの活動を糧としながら、新たな一歩を踏み出したいと思っております。どうぞ市民の皆様方もこれまで以上のご支援とご鞭撻を美術館に寄せていただきますようお願い申し上げます。20年間本当にありがとうございました。

参与在任の頃

名古屋ボストン美術館館長 馬場 駿吉

開館二十周年、心からお祝い申し上げます。名古屋美術館に参与というポジションをいただき三年間を過ごしたのは平成十年十月から十三年九月まで。すでに懐きさを感じさせられるほどの年月が流れました。永年勤めた大学医学部教授の職を定年で辞し、以後は高校生の頃から夢みていた文筆の

名古屋美術館建設にまつわる黒川先生の思い出

黒川紀章建築都市設計事務所所員 茂木 愛子

名古屋美術館の建設地が白川公園に決るまで幾つかの候補地が上げられて、今とは異なる美術館となる可能性もありました。美術館完成により、白川公園は科学館等と合せて名古屋市の文化的中心となっています。

緑豊かな環境条件、立地の法的条件等から立体・平面・配置などが計画されて、この美術館はあるべき姿として生み出された様に思います。基本計画時に黒川先生から発せられていたものは、其れまでの設計時とは異なり、かたちになる前の言葉が生まれているようでした。

世界に第二の人生の多くをゆだねたい、と考え、医療現場からのお誘いに耳を傾けず、漫然と半年ほどを過ごしておりました。そこへいただいたのが前述の美術館参与という仕事。役割はとくに学芸部と管理・事務部門との中間に立って、館内の意思の疎通をスムーズにすると同時に、ボランティアの方々とも交流し美術館内外の風通しをよくすることに努力されたし、とのことでした。名古屋美術館はことに現代美術に強い関心を示していることに人一倍親しみを感じていただけに、この要請は即座に喜んでお受けしました。私は震災前、現在の市美術館のやや北側に

例えば「記号論と建築について」「写しとは」などでした。私などは話を伺いながら、どう形にするのか試行錯誤を繰り返しておりました。溢れるような言葉とスケッチの一端から美術館の原型が造られ、サンクンガーデンとそれに続く吹抜空間や、波打つカーテンウォール等詳細なディテールを積み重ねて、コンセプトである主軸と副軸を表現し、機能的な展示空間であることを目指して設計を進めました。建設中にも毎週黒川先生と綿密な打合せを行い、例えば壁の白色についても5、6種類のサンプルを繰り返し作成し決定に到りました。美術館は名古屋市の事業としても注目されており、市建築課担当の方々、JVの方々現場の中は絶対良いものを造るという意気込みに満ちていました。こちらも刺激されて質の高い建築の完成を皆様と共に目指しました。それはいつも緊張感があり、整理整頓されて安全性にも気を配り活気ある現場であった事に

「反省は停滞なり」から「全体性への配慮」へ

名古屋美術館参与 石黒 錦二

緑の中の美術館。世界的建築家として名高い黒川紀章氏設計による白亜の殿堂。彼自身が最も愛した建築の一つとして、実に細やかに隅々まで行き届いた空間。この市民に愛される美術館として開設された名古屋美術館が、もう開館20周年を迎えるという。

人間形成でいうと、二十歳の成人式ということになる。そこにはいろいろな感慨が存在するのは事実であろう。雨あり風ありで、決して平坦な道のりだけではなかったはずだ。まずこれを支え、日々を築いてきた現場の、持ち場持ち場の一人ひとりに、さらにはそれを近くから遠くから暖かく声援していただい



「至近距離の星たち」展 会場風景

あった白川小学校(戦中は国民学校と呼称)に一年生から五年生まで通学。その思い出の地に五十五年ぶりに通うことになった不思議さも身にしました。

美術館に勤務し、その活動を内側から見ますと、企画展、常設展の長期および短期計画、図録の作成、美術館の方向性になった収集方針の検討と調査・研究、一般向け講演会の開催、ギャラリー・トーク、教育普及活動、ボランティアの方々の勉強会支援、など限られた予算と時間内での学芸員の仕事はめまぐるしく多忙。少しでもその仕事を分担したり、お手伝い出来ることがあれば、と講演、ボランティアの方々へのレクチャーや質疑応答、展覧会広報活動、美術関係者との対応などに

表れていました。

私は仕上げる始まる前の躯体を観る事が好きですが、当美術館では雪の降りしきり中での躯体を観て建築の確かな骨格を感得したことを思い出します。

この仕事において黒川先生との思い出は数多くあります。こちらの美術館は著名なデザイナーの家具が置かれていますが、その中に黒川デザインの家具を使っていたいただいています。幾つかの家具は設置時に当初の色が空間のイメージと違うと云われ、何度も塗り重ねたものです。そんな時黒川先生の空間や色に対するこだわりや思いを感じ取ることが出来ました。職員の方が移られ開館準備がスタートした頃、黒川先生が最終チェックに美術館を訪れました。アプローチ広場からアプローチグリットを通り、美術館の内外部を一周りされて、空間を確認し、様々なディテールに納得された様子がみられました。

たご関係者のみなさんに、そして何より市民の一人ひとりに感謝したい。

しかし、問題はこれからである。与えられた課題の一つひとつに真正面から向き合わねばならないだろう。これまで、人間の成長過程で言えば、「感覚」や「感性」いっぱいの子供期として、まっしぐらに「反省は停滞なり」の日々で居られた。いよいよミドル期として、それなりに「知」を知り、「言葉」を覚え、そして「精神」とか「心」の問題も課せられる「全体性への配慮」を問われる季節となるのだ。

市民美術館として、どう在るべきか。「質」とは何か。その答えの一つひとつを具体的に引き出すために、持ち場持ち場の一人ひとりが、真正面から向き合わねばならない。入ればいいというものではない。しかし入らなくてもいいという時代は、とうの昔に終わっている。「反省は停滞なり」から、背負う「全体性への配慮」という課題を前に自戒する。

も出来るだけかわるよう努力しました。昼食は可能な限り事務部門の方々と一緒にしながら仕事上の問題点を話し合ったり、時にはパソコンの性能などについて教えてもらったことも懐かしい思い出です。こうして三年間はまたたく間に過ぎました。

市美術館を退いてからも当「アート・ペーパー」連載コラムの執筆を長く続けさせていただいたこと、私のささやかな現代美術コレクションによる「至近距離の星たち」展を開催していただいたことなど絆が細くはありませんでした。コレクション展に出品した主要作品はそのまま今も寄託させていただいて、少しでも常設展のお役に立っている様子を見ると嬉しくなります。

名古屋美術館の歴史の一端に歩調を合わせていただいた経験は、現在の名古屋ボストン美術館館長や豊田市美術館運営協議会会長の職務にも大いに役立っています。これからは美術館同士の連繋も一層深め、相乗的に美術愛好者をふやす努力を続けることが必要になって来ます。それと共に地元の有望な作家たちに勇気を与えるような企画も考えなくてはなりません。さらなるご発展とご指導をおねがいして筆を置かせていただきます。

美術館の中心となる3層吹抜空間や広場に彫刻が次々と設置されて、建設当初のガランとしたものから美術館としての性格がかたちづくられて、様々な人々があちらこちらに佇み動くことで空間が生まれ変わり、皆様の共感戴き、愛されるものとなる事を願っています。



名古屋美術館外観

名古屋市美術館と僕の20年間

現代美術家 森北 伸

白川公園といえば名古屋生まれ名古屋育ちの僕にとって、小さな頃からの遊び場だった。よく自転車に乗って野球や鬼ごっこをしたり、夏にはセミ採りをしたり、また大好きな科学館にはプラネタリウムと本館見学の両方を見ることがとても贅沢だと感じながら少ない小遣いの中からお金を出して何回も通った。

そんな思い出のある白川公園に名古屋市美術館が開館したのは、ちょうど僕が美術大学に入学した年であり、当時とてもモダンな建築と相まって色々な作品が僕にはとても刺激的だった。マチスやモディリアーニの絵画とにらめっこしたり、アバカノヴィッチやボロフスキーやゴームリーなどの彫刻の周りをウロウロしながら、作品と問答をした。美術作家を志していた僕にとって作品を見るということは勉強する行為に等しく、見終わった時はどっと疲れたものだが、帰りには公園のベンチで缶ジュース飲みながら物思いにふけるひと時がとても癒され好きだった。

勉強といえば一回目のポジション展ではあ

る作家の搬入の手伝いをしたり、赤瀬川原平さんの展覧会に合わせて再制作したことなど、生の作家に触れる貴重な体験が出来たし、美術館に通い、裏方ながら関係者みたいに振舞えることがなにやら嬉しかったことを覚えている。その後、僕にとって一番の重大事件は三回目のポジション展の出展作家に選ばれたことであり、若かった僕にとって作家を続けていく大きな勇気をもたらした。また大きな空間での展示や不特定多数のお客さんの反応、初めてのトークショー、もっと言えば公的機関で発表する意義、それらの不安とプレッシャーは今までに感じたことのないもので、純粋に作品を作ることと別に、状況や状況の関係を直接感じ考えるいい機会にもなった。今にして思えば、同じ年に美術の道端に生まれ歩みを始めた僕と名古屋市美術館だけど、大げさに言えば育て後方支援してくれた母親のような存在が名古屋市美術館なのかもしれない。

個人の事を言えば、僕が作品を作ってきた20年間はあっという間であり、凡人の僕としてはやっと作家としてスタート地点に着いたなあと考えている。それでも周りの環境に恵まれ作家活動を続けられたことは、とても誇れることで、まだ見ぬ先の世界への肥やしとして大切な時間だった。続けることが難しい……色んな人から散々聞かされたが僕はまだスタート地点なので前に進むしかないし、苦

楽共々これからのことを楽しんでいきたい。その楽しみのひとつとして爺ちゃんになった時に勉強ではなく楽しみとして名古屋市美術館に行き、たくさんのすばらしい作品を堪能



「現代美術のポジション2003」展 会場風景

マン・レイへのドア・ノッカー

マン・レイ・イスト 石原 輝雄

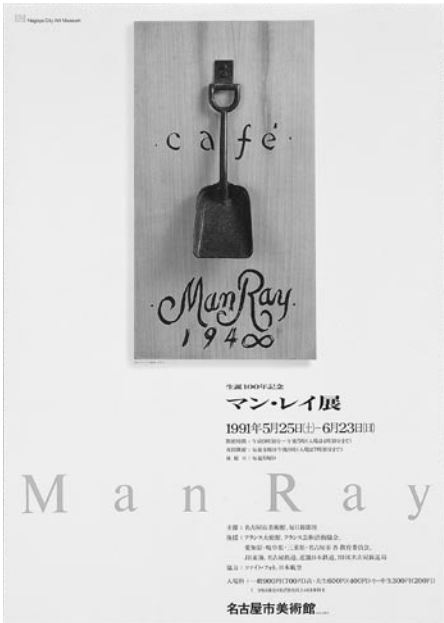
名古屋市美術館が開館されて20周年を迎えたとお聞きした。開館展から拝見させて頂いた美術ファンの一人として、共に歩んできたような喜びを覚える。おめでとう御座います。美術館の魅力は常設展示と独自企画にあると思う。ダダ・シュルレアリスムを核とした美術思潮に感心を寄せるわたしは、学芸員の問題意識に始まり、地道な研究活動によって裏打ちされ、見事に開花した幾つかの展覧会を思い出す。「日本のシュールレアリスム」や「異郷のモダニズム」などは、若い研究者が実見の機会を持てなかった事を嘆き、カタログの記載から会場を想像し、次の時代へのアプ

ローチを組み立てる出発点となっている。展示は名古屋だけで開かれ、観たければ「名古屋にいらっしやい」と云う姿勢はあっばれで好感を持った。手許に保管するカタログやポスターを見直すたびに、拝見できた幸せを感じている。有難う。

写真家として知られ、オブジェや映画でも注目されるマン・レイの展覧会が、20年の間に美術館で二度開催されている。わたしは熱心なマン・レイのファンで、作品や資料を収集している。もちろん、全国の展覧会へ出掛ける。1991年5月、600点あまりを展示する大回顧展が名古屋に巡回された。「カフェ・マン・レイ」を使ったポスターを街で知った時には、期待が膨らんだ。玩具のシャベルがドア・ノッカーになっている作品の図版だが、「トントン」と来意を告げて会場に入りたい誘惑に満ちていた。企画展示室の最初の壁面にオリジナルを観た時、マン・レイの遊び心が通

じているのだと嬉しかった。こうした、美術館との交流から名物企画である「クリスマス・ショー」で、わたしのコレクションを発表することになり、1996年12月、「我が愛しのマン・レイ」展を常設展示室3で開催していた。個人の収集品が公立美術館の展示室に置かれたのは快挙であるように思う。先見の關係者の英断に心より深く感謝している。

美術館を訪問する度に拝見する常設展示品。観る者の内面が反映するのか、印象は都度変化する。素晴らしい作品は人生の基準原器となって心を照らす。ミュージアム・ピースと比較するのは不謹慎だが、マン・レイ作品を自室に飾りながら、季節の移り変わりと共に眺めていると、彼の生きていた時代を共有することになる。弊宅の扉を「トントン」と叩いてくれたなら、最近、手に入れた小さな油彩を抱えて美術館へ走ろう。美術品は個人の為ではなく万人に開かれねばならない。



「マン・レイ」展 ポスター

常設展で会いましょう

俳優 イッセー尾形



ロビーのウールワース・ビルディングに興味津々

たまたまふらっと入った美術館から、仕事を頼まれるという御縁ができるって、やっぱりアートの力はすごいですね。

名古屋公演が始まってずいぶん経ちますが、今では年に二回新作ネタを持って行きます。僕の出不精ネタが全国に先がけて日の目を見た最初が、名古屋。

開演のずい分と前から固唾を呑むように静まり返った客席。舞台の袖の暗がりです「名古屋の人は笑ってくれるんだろうか」とドキドキしていた事を今でもハッキリ覚えています。その公演はとっても上手く行って、全国

公演や海外にまで場を広げるキッカケとなった、大感謝公演そのもの。

大きな公園の中にある名古屋市美術館に入る前から街の喧騒を忘れさせてくれます。そして中に入り地下に下りると、大きなポップアートの街が、無音の喧騒をぎっしりと詰め込んで出迎えてくれるという趣向。

ステラのカラフルな作品や藤田嗣治の自画像やシャガールもあつたりしますが、僕はなんといってもモディリアーニの「おさげ髪の少女」です。

この人の人物画には目ん玉がよく描かれていて、キチンと正面を見つめています。こっちが見つめられる側にもなる戸惑い。モディリアーニには貧困、結核、深酒を支え続けた妻がいて、幼い少女を残して夫の後を追ひ、身を投げている。

絵画の少女が僕に話しかけてくる。「どうですか今回の公演は？」と。モディリアーニも問いかけられたにちがいない。僕は「精一杯やっていますよ」と答えます。すると「私は子供ですけど、目を見れば分かるんです」とも言う。モディリアーニは何と答えたのだろう。そこでしばし睨めっこ。もちろん僕の方から目を外して、また半年後に会いましょうと歩きだす。

こんな風に、モディリアーニの絵の前での奇妙なミニ「行事」をするのが名古屋。

企画展もちろん楽しみですが、いつ行っても必ずそこに居てくれる常設の作品達と顔なじみになること。そんな喜びを教えてくれたのもこの名古屋市美術館です。

旅公演の昼間、美術館に足を運ぶようになりましたが、県立と市立がどこにでもあるようです。僕の思い込みに過ぎないかもしれませんが、市立には県立にはない独特のこだわりがあるようで、ひきつけられます。

私の名古屋市美術館

女優 真野 響子



昨年、暮、名古屋のNHKから刑事ドラマの出演依頼を受けたとき、承諾した中に一つ不純な動機がありました。それは、二ヶ月程東京から通う間に、名古屋市民になったように、数度は名古屋市美術館に行けるのではないかと思ったということです。

初めのうちはスケジュールがうまく行って兵庫県美と同時開催されていた「河口龍夫展」にふらっと何うと、そこで先生が子供の為のワークショップをなさっていて、運良く興味

し、帰りには公園のベンチで缶ジュース飲みながら物思いにふけり、青々と広がる木々や遊具で遊ぶ元気な子供たちを見ることが出来るようにと思っています。

深い話を沢山伺うことができました。又、クリスマスの日もリハーサルがあったのですが、終わってすっ飛んでゆくと、同展の最終日だったのです。これ以降はそうは問屋がおりさず。同じ市中にいながら覗くこともできないジレンマを感じましたが、再びご縁ができて、「モディリアーニ展」では、作品解説や対談にも参加でき、美術の神様はちゃんと解っていて下さっていらしたとつくづく感謝しております。

我ながら陳腐な表現で、いささか気後れるのですが、この美術館は「森の中の泉」のような美術館だと思っています。湧く水はいつもこんこんと尽きることなく新しく、これを嗅ぎ付けて、アーティストのみならず、様々な人を引き付けます。それはもちろん、立地条件の良さもあるのですが、質のいい、いつも世界中から引っ張りだこのコレクションや、時代を先読みした企画展や、職員の皆様がかもしだすアットホームな雰囲気のなせる技だと思います。

こんなことを書きながら、肝心な名古屋市民の皆様は、この美術館の価値を本当にわかっているのかしらという疑問がふと頭を過(よ)ぎりました。皆さん、もったいないですよ。もっと大切にしなきゃ。まあこれは、他市民のただのやっかみだと思って下さっても結構ですが。

最後に私にとって思い出深い作品を三つ。モディリアーニ「おさげ髪の少女」、ルフィーノ・タマヨ「苦悶する人」、そしてアンゼルム・キーファーの「シベリアの王女」どれも、出演した番組の中で取り上げた画家で、其の前に立つと懐かしさが込み上げてきます。

これからも、湧きつづける泉であって下さい。

学芸員の仕事

愛知芸術文化センター総長・横須賀美術館館長
島田 章三

過日、私が館長をしている横須賀美術館で日本博物館協会の主催で美術部門研究会が開かれた。テーマは＜コレクションと学芸員＞である。全国の博物館や美術館から50人程の学芸員が集った。会場提供ということで私が開会挨拶をした。その内容は「博物館や美術館のコレクションは、過去から現在、そして未来につなげてゆくものであり、極端ないい方をすれば、現在のコレクションをしっかりと保存をして、次の時代へバトンタッチをするだけで良いのではないだろうか。しかし、この、しっかり保存が大切なことで、コレクションは毎日、少しづつでも劣化しているのである。だから劣化を防ぎ修復することも必要になってくる。そして、火事や地震に対しても考えなくてはならない。最近の例では韓国の南大門、そして、さかのぼって、法隆寺金堂壁画の焼失といった、一寸した不注意から、かけがえのない宝を失うことになるのである。日本の博物館、美術館には、莫大な収蔵品がある。次の時代には重要文化財や国宝に化けることもあり得ることだ。学芸員諸氏は広く深く、美術品の研究をしていただきたい」で結んだ。

名古屋市美術館の教育・普及活動について

愛知教育大学教授 藤江 充

名古屋市美術館が開館した1988年頃には、まだ、「美術館教育」という言葉は知られていませんでした。関東では、1990年に女性研究者を中心とした「美術館教育研究会」が発足し、1992年には、東京と横浜で欧米からのゲストを招いての美術館教育シンポジウムが開かれ、美術館教育専門のジャーナルも同年に刊行されました。

その1992年に名古屋で、私も呼びかけ人であった「アミューズ・ヴィジョン研究会」が発足しました。この研究会は、美術館教育に関する定期的な情報交換の場として教員と学芸員とに開かれたものとしては全国に先がけたものでした。事務局は、呼びかけ人であった伊藤優子さんが属する名古屋市美術館内に置かれていました。会には関東や九州からも参加があり、近隣的美術館を巻き込んで活動が広がっていきました。なかでも、名古屋市美術館の「夏休み子ども美術館」の実験的なセルフガイドや視覚障害者のための触って見る展覧会などが全国的に注目されてきました。

10年は一昔、20年は大昔

愛知県美術館館長 牧野 研一郎

名古屋市美術館が難産の末に誕生してはや20年。その出生の瞬間を比較的時間近に見ていた者としては大きな病氣もせずに順調に生育し今日の成人式を迎えられたことに祝杯をあげたい気持ちでいっぱいです。思えば当時の名古屋は文化不毛の地として周辺から謂われなき中傷をうけ、いや周辺ばかりでなく当の名古屋人ですら「名古屋とばし」という不思議な語感の言葉をさかんに口にしていたほどに、文化的環境に関しては自嘲的態度に終始していました。私はその頃、三重の美術館から愛知県に移籍し、新文化会館(芸術文化センター)の設立準備に携わっていたのですが、この「名古屋とばし」という言葉を各方面の人々から聞かされ驚いたものでした。日本中のどの地域でもこうした自嘲的な言葉は無いのではないのでしょうか。逆に言えばそれだけ文化への欲求が他のどの地域よりも強かったということでしょう。名古屋市美術館が開館すると、何十万という人々がルノアール展や東山魁夷展に押し寄せたことでそれは証明さ

今、人気のある美術館で学芸員を募集すると大変な数の応募者があるという。要するに自分で企画展を実現させて、恰好いい仕事だと思われている。しかし、前に述べたように美術の範囲は、間口が広く、奥は限りなく深い。世界の文科系の中で絵画、彫刻、工芸、版画、写真、映像パフォーマンス、ダンスとそのジャンルは年と共にもっと多様化することであろう。

いま、原稿をかいている私の部屋にピカソの版画が掛けてある。＜画家とモデル＞シリーズの一枚である。しかし、この一枚の版画から色々なことが読みとれる。用紙はフランスのものか、イタリア製か、工房はパリかバロリスか、50枚刷っているが作者用と贈呈用に何枚刷っているのだろうか、など、一枚の版画でもこれだけの疑問と研究課題があるものだ。

横須賀での研究会のテーマ＜コレクションと学芸員＞は歴史と人とが共存しながらの戦いに思えてならない。

最後になってしまったが、名古屋市美術館は今年、開館20周年を迎える。名古屋に住んでいる私は開館当初から、外部委員などでいろいろとかかわってきている。設計者の黒川紀章さんとも亡くなる数年前から、必ず年二回、春と秋にお会いしていた。そのたびに「島田さん、名古屋市美術館は私の代表作ですよ」といいふくめられてきた。最近、名古屋市美術館は、どんな企画展をやってもうまく会場が成りたっているので不思議だと思っている。やはり黒川さん御自慢の館(やかた)なのだ。

特に、子どものための企画では、教員養成系、美術系などの多数の学生ボランティアの参加があり、学生たちも、子どもやアーティストとの交流体験を通して、美術や教育について学ぶことができました。また、美術館の所蔵作品をハガキサイズのカードにした鑑賞教材「アートカード」を作成し市内の学校へ貸与することも、今では他の美術館でも行なわれていますが、最初は名古屋市美術館でした。

美術館には、作品の収集、調査研究、保存、展示等の多様な業務があり、教育・普及はそれらのうちの一つです。ただ、美術館での調査研究や展示内容と教育活動とは切り離して考えることはできません。また、美術館教育も子どもだけを対象とするものではありません。名古屋市美術館では、調査研究成果を活かした「コレクション解析学」講座やボランティアによる成人向けのギャラリートークなど各業務の成果を活かした「二十歳」にふさわしい若さと行動力にあふれた事業が展開されてきました。

今後は、今までの実績を踏まえて、所蔵作品を活用した長期的なプログラムによる教育活動、市民が気楽に参加し来館できる市民参加型のプロジェクトを通した普及活動、また、他の美術博物館との共同企画による連携事業などを、若さと行動力を失わずに大胆に進めていかれることを期待しています。

れましょう。名古屋市美術館が先陣を切った後、愛知県美術館や豊田市美術館、岡崎市美術館などの公立美術館が続々と開館し、また日本有数のコレクションを誇るメナード美術館をはじめとする私立の美術館が次々と設立され、名古屋ポストン美術館も開館するなど、今日この地域は文化不毛の地どころか美術館戦国時代の様相すら呈しています。この春にはまた新たに碧南市藤井達吉現代美術館がオープンしました。20年間にこれほどの変貌を遂げた地域はどこにも無いのではないのでしょうか。愛知県美術館と名古屋市美術館とは夏の野球、冬のスキー合宿などで学芸員同士濃密な交流を重ねてきました。遊びばかりでなく、1994年には自治体の壁を越えて、両館の共同企画で「環流―日韓現代美術展」という展覧会を同時開催しました。市美の学芸員諸氏はよく言えばそれぞれ個性的、はっきり言えば灰汁が強い面々で、その点景美とは好対照なのですが、私が名古屋市美術館のこの20年間に開催された多くの企画展のなかで今も強く印象に残っているのは、「日本のシュールリアリズム展」や「安井仲治展」などその灰汁の強さがはっきりと示されたものです。これからも、名古屋市美術館らしい、灰汁の強い上質の展覧会の歴史を積重ねて行かれることを期待しています。

名古屋市美術館の思い出

メナード美術館館長・名古屋芸術大学教授
相羽 規光

私が名古屋市美術館の建設計画を聞いたのは、確か1984年ころ、パリで荻須高德先生からであった。それまで名古屋には美術館がなく、せっかく東京で企画した展覧会も名古屋ではわずか2―3週間しか開催できないか、名古屋を素通りするしかなかった。

やっと名古屋にも本格的な美術館ができるという喜びでかなり興奮した記憶がある。

名古屋市美の開館時期が正式に決まったとニュースを受けて、そのときはまだ東京新聞文化事業部で展覧会の企画・運営をしていたが、開館記念展をぜひ地元紙である中日新聞で開催したいという思いから、早速、企画を練った。

いくつものアイディアの中から、最終的には日本と西洋を代表する画家の回顧展で、しかも少なくとも入場者20万人以上を期待できる画家ということで、東山魁夷とルノアールを取り上げることにした。その結果、ルノアール展34万人、東山魁夷展24万人という入場者を記録、開館記念展として大成功に終わった。

企画を美術館に提案し、担当学芸員が決まり、本格的な展覧会の作業が始まったが、私にとって何よりも幸いだったのは、ルノアール展のF氏、東山魁夷展のY氏という二人の優秀な学芸員と巡り合ったことだ。

マスコミが美術館と共催で展覧会を開催す



「東山魁夷」展 会場風景

私と名古屋市美術館

江口 紀子

娘のお絵かき教室で北斎の『「赤富士」を描こう』という時間があり、子どもなりに真剣に取り組み、満足げに見せてくれました。それがきっかけとなって北斎の絵に関心を持ち、娘と北斎展にやってきました。

入場しようとしたところ、北斎展の入場者10万人目ということ。本当にびっくりしました。記念品として北斎展の図録と《富嶽三十六景 凱風快晴》の木版画をいただき、感激しました。

昨年夏に催されましたダリ展に娘を連れてきましたときには、描いたものよりも奇抜な造形物に興味があったようで、今は徐々に細かいものにも目が行き、色々なことを指摘してくれるようになり、嬉しく思います。今回の北斎展では、私のような素人でも知っている有名な作品、子どもと一緒に楽しめる面白い作品、そして今回初めて里帰りしたヨーロッパで所蔵されている貴重な作品の数々を十分に堪能させていただきました。その上、常設展まで楽しませていただき、本当にひとつで二度おいしい思いをいたしました。

名古屋市美術館には開館して以来、好みの展覧会を選んでは見に来ておりますが、白川公園の中にあり、都会の喧噪をしばし忘れさせてくれる憩いの場として利用させていただいております。最近はお庭もさらに整備され、

場合、マスコミによってそれぞれ美術館との付き合い方が違う。我々は、企画を持ち込んだ責任と企画を遂行していく過程で発生する様々な問題に対処するため、最初から学芸員と一緒に展覧会を創り上げていくという姿勢で行動する。それだけに学芸員の能力や人間性は、展覧会の成否に大いに関わってくる。

特にF氏とは、開館記念のルノアール展をはじめ、マチス展(1991年)、モネ展(1994年)、ピカソ展(1998年)、ルノワール1870―1892展(2002年)など幾つかの大型国際美術展の開催のため、二人で手分けして世界を駆けめぐり、それなりに見応えのある展覧会を創り上げ、名古屋市美術館の存在を全国にアピールできたのではないかと確信している。

開館展のルノアール展では、初めて美術館の外まで入場者の行列ができ、スタッフ総出で整理にあたり、91年のマチス展では、エルミタージュ美術館からマチスの名作25点を借りる予定が、ゴルバチョフ政権のクーデターで開催直前まで作品が到着せず、綱渡りだったり、20年間の間には色々ドラマがあった。

また、私が1985年に東京国立近代美術館でモディリアーニ展を開催した際、ニューヨークのバールス・ギャラリーから借り出した1点(おさげ髪の少女)が、その後に名古屋市美の目玉作品となっているのも私にとってはうれしいことだ。

今、美術館は冬の時代。芸術の世界も東京一極集中が叫ばれる中、地方の美術館の役割は大きい。名古屋市美もこれからはいかに市民の目線で美術館を運営し、地域の芸術文化の発展に貢献できるかが問われるだろう。更なる発展を期待したい。

木々も十分に剪定されて明るい感じに変わってきています。人々が集い、子どもが遊ぶ場として最適な環境だと思います。数年前には幼い子どもを遊ばせるためだけに来ていたこの公園ですが、いつかは娘と一緒に、今度は名古屋市美術館ですばらしい美術品に囲まれて、ゆったりとした時間を持てたらと思っておりました。それが今、少しずつ実現されつつあるようで、今後も楽しみに感じております。(北斎展10万人目入場者)



アート・イズ・ フォー・ザ・スピリット (芸術は精神のために)

山脇 一夫

1988年3月30日名古屋市美術館の開館を告げる広告を新聞各紙に掲載した。
その時の見出しが「アート・イズ・フォー・ザ・スピリット(芸術は精神のために)」であった。これはアメリカの現代美術家ジョナサン・ボロフスキーの言葉である。「美術を精神の糧として生きるために、市民の皆様が美術とともに生きる喜びを味わっていただくために、名古屋市美術館は日本や世界の優れた美術を紹介していきたいと思います。美術館は現代と



開館記念展「20世紀絵画の展開」 会場風景

イベントガイド

ボランティア活動開始10周年!!
多彩な記念イベントを企画しています。

今年は、名古屋市美術館開館20周年というだけでなく、名古屋市美術館ボランティア活動開始10周年の記念すべき年でもあります。
現在、1期から5期まで、93名のボランティアの皆さんが美術館の活動に参加しています。通常の活動としては、毎日2回(午前11時～／午後2時～)の常設展のギャラリートーク(全国的にも珍しい)、特別展のギャラリートーク、学校などの団体向けガイドトーク(たくさんのこどもたちが楽しく美術鑑賞しています)、「キッズの日」+「おとなの日」の教育プログラム、(市内の小中学校への)出前アート体験(アートゲームに挑戦!)などの活動をはじめとして、昨年から総合受付や図書室での案内活動(毎月5日間)も開始しました。毎月1回の定例会でのボランティア同士の話し合いや情報交換、美術研修(レクチャー)によって、日々研鑽を積みながら、和気藹々と活動しています。
さらに、今年は活動開始10周年ということで、多彩な記念イベントを開催しようと、プロジェクト・チームを立ち上げて、企画立案

《開館20周年記念フライデーナイトシアター》開催のお知らせ

名古屋市美術館の開館20周年を記念してフライデーナイトシアターをお送りします。9月には、名古屋市美術館で作品を所蔵している作家たちを特集します。名古屋市美術館の常設展で時々見かける作品を創った作家たちの素顔を再認識したり、作品をまた違った角度から楽しむことができます。また、2月終わりから3月にかけては、ドキュメンタリーの特集として、この20年間に活躍したアーティストたちに関するビデオを上映します。様々なジャンルで活躍するアーティストたちの様子を知ることができると同時に、ドキュメンタリー・ビデオの作品としての魅力もたっぷりと味わうことができます。どうぞ、金曜日の夜を美術館で楽しくお過ごしください。

1. 名古屋市美術館の所蔵作家たち
9月5日「森村泰昌 女優家の仕事」(48分)、
「森村泰昌 1985-1996」(21分)
9月12日「イサム・ノグチ 地球を彫刻した

いう巨大な海に浮かぶ精神の船SPIRITUAL SHIPです」というメッセージを発信した。
そしていっしょに掲載したのがボロフスキー作「ハンマリングマン」であった。美術館の天井の高いロビーに立って、ハンマーを打ち下ろしている労働者の像で、これは開館前に設置したものである。美術館正面のカルダーのスタンディング・モビールもこの頃東海銀行に寄贈していただいた。
ナムジュン・パイクの「ロボット家族」もコレクションしたが、たまたま日本に来ていたパイクさんが開館記念式典に来て下さったことが嬉しい思い出として残っている。
開館式と言えば、山本圭吾さんなど地元のアーティストの協力を得て美術館と栄の町をアートで結ぶ「アート交差点」を実施したことが印象深い。こうして名古屋市美術館は出発した。(1988年10月1日～2001年3月31日 名古屋市美術館学芸課長)

しています。
すでに開館記念コンサート(4月25日)の際に、ボランティアの編集・発行による「かわら版」ニュース『ボランティアによる美術館の楽しみ方案内 名古屋市美術館へようこそ!』(創刊準備号)を発行しました。この「かわら版」に面白く楽しい名前を付けて、これから隔月くらいで刊行していきたいと意気込んでいます。
次に、記念イベント第1弾としては、8月8日すなわち「まるはちの日」には、「1日まるごとギャラリートーク」として、来館した皆さんに、常設展のギャラリートークを是非体験していただきたいと思っています。この日は金曜日で夜間開館(午後8時まで)していますので、珍しく夜のギャラリートークを実施します。暑い夏の夜、お仕事帰りに、静かで落ち着いた美術館で、ボランティアの楽しいギャラリートークに癒されに来てみてはどうでしょう。
さらに、10月の名古屋まつりの時期(11日～13日)には、美術館と地域を結ぶ「アート・マップ」やモディリアーニ《おさげ髪の少女》をテーマにしたイベントなどを企画中ですので、楽しみにしてください。
これからもボランティアの皆さんには、名古屋市美術館の活動に積極的に参加して、多くの皆さんに美術館が親しまれ、愛されるように頑張っしてほしいと思っています。

男」(52分)
9月19日「シャガール 愛の旅 魂への帰還」(55分)
9月26日「ナムジュン・パイク 風呂敷天下 ① GOOD MORNING MR. ORWELL」(38分)、「ナムジュン・パイク ALL STAR VIDEO」(32分)
2. ドキュメンタリー特集
—この20年間で活躍したアーティストたち—
2月27日 現代ヨーロッパを代表する二人のアーティスト「レベッカ・ホルン」(45分)、「ボルタンスキーを探して」(45分)
3月6日 写真の魅力
「血の絆：サリー・マン」(32分)、「アンリ・カルティエ＝ブレスソン—疑問符」(37分)
3月13日 ちょっと変わったアーティスト「ジャン・ピーエール・レイノーの家」(31分)、「マネー・マン」(56分)
3月27日 ダンス&ミュージック
「ラララ・ヒューマンステップスinベラスケスの小さな美術館」(50分)、「ONE ENO」(22分) いずれも午後6時～
2階講堂(定員180名、入場無料)

美術館生活を振り返って

水谷 栄太郎

美術館学芸課長へという異動の内示を受けて、不安を覚えた。前任者が斯界で実績のある大物であるのに引き比べ、私は考古学専攻で、美術館については実務経験は勿論、知識も人脈もなかったからである。また、この人事は、美術館界に何らかの波紋を投げかけるとも感じた。しかし、美術館という未知の世界に対する関心もあり、「博物館と美術館とは違う」という漠然とした思いへの答が得られるかもしれないという期待もあった。
着任する側に不安があるのだから、受入れ側、殊に学芸課の不安は想像に難くなかった。しかし、素人の学芸課長を迎えるということ

美術館はドキドキ

神谷 浩

美術作品、美術館のキーワードは、《ドキドキ》だとわたしは考えています。作品を見て、心が高ぶったりしませんか。音楽や文学作品に感動するのと同じです。美術館は、お勉強の場ではありません。心をときめかす場です。造形表現そのものの面白さに見入ることもあるでしょうし、作家の表現したい内容に共感することもあるでしょう。時に言葉による補足説明が必要な場合もありますし、他の手段と組み合わせあった造形もあります。どんな造形であっても、ドキドキする瞬間があります。それは何物にも代え難い至福のひとつなのです。私自身、かつて来館者として名古屋市美術館を外からながめていた時には、地下のロビーで、黒い巨人がハンマーを振り下ろす姿に「こりゃ面白い。」と思ったのが、名古屋市美術館体験の始まりでした。
美術館は、言ってみればこの《ドキドキ》を、広く市民の皆様体験していただくべく、多岐にわたる活動をしてきました。市民の皆様と作品をつなぐ最も一般的な場である展覧会では、開館以来20年の間に100本の展覧会を

で、学芸員のモラルアップにつながったのかもしれない。私は、美術や美術館については全くの不安内であるからその専門的な事柄については学芸員にほぼ委ねるようにし、説明を受けることにした。ただし、美術館の活動については博物館と共通することも多いので、積極的に意見を述べ指示を出すこととした。また、学芸課と総務課・教育委員会との橋渡し役を目指した。予想したとおり博物館との違いもあったが、学芸員は力量を発揮しサポートしてくれ、在任中の2年間で多くの貴重な知見を得ることができ、その一部を現在の職場で生かすこともできたと思う。展覧会の準備をして後任に引き継ぐことができなかったことなど至らぬ点も多く忸怩たる思いもあるが、美術館に在籍できたことに感謝している。今後は、博物館と美術館の協力・連携に努めてゆきたい。(2001年4月1日～2003年3月31日 名古屋市美術館学芸課長)

開催してきました。4月からのアメデオ・モディリアーニ展は、101本目。一つの区切りとして、また前に進んでいきます。美術館の基礎体力を示すバロメータであるコレクションは、徐々に充実し、それを紹介する常設展も、作品を入れ替えながら展開してきました。早い時期から取り組んできた教育活動はドキドキを手助けする重要な活動です。
美術館活動は、時代と共に変化する部分も必要でしょうが、生きていることの喜びを感じ、悲しみにうちひしがれた心を慰め、生きる勇気を与えてくれる、美術館はそうした《ドキドキ》を提供する場であるということを忘れずに次の20年にバトンをつないでいきたいと思っています。(2003年4月1日～2008年3月31日 名古屋市美術館学芸課長)



地下ロビーからボロフスキーの作品をのぞむ



常設展 会場風景

【編集後記】
今回は20周年を記念した特集号ということで、いつもとは違った趣のアートペーパーとなりました。名古屋市美術館を外から暖かく見守って頂いた皆様の原稿、そして名古屋市美術館を運営してきたメンバーの原稿を見てみると、沢山の人が名古屋市美術館を巡って様々な思いを抱き、活動し、そのことが、人と美術とが関わる豊かな空間を作り出して来たのだと思います。また、多くの人に支えられて20年間を歩んで来たのだということも、改めて感じます。人間で言えば成人式を迎えたところですが、まだまだこれからが、人生の本番、といったところでしょうか。様々な困難もあることでありますが、今後も成長を続け、成熟し、皆様から本当に信頼され、愛される美術館となるよう、努力していきたいと思っております。ひきつづきまして、ご指導、ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

アートペーパー第77号 発行日：2008年4月1日
発行 **名古屋市美術館** [白川公園内]
http://www.art-museum.city.nagoya.jp/
〒460-0008
名古屋市中区栄二丁目17番25号
地下鉄《伏見駅・大須観音駅》下車
Tel.052-212-0001 Fax.052-212-0005
休館日：毎週月曜(祝日の場合は翌日)

 Nagoya City Art Museum